

比較文明の視点から 日本の在り方を考える。

科学史・文明史研究の第一人者である東京大学名誉教授・伊東俊太郎氏と
川勝平太 静岡県知事が、科学の課題や日本の在り方について語り合った。

静岡県知事
かわ かつ へいた
川勝平太

東京大学名誉教授
いとう しゅんたろう
伊東俊太郎

今こそ科学の 倫理について考える時

知事 「伊東俊太郎著作集」全十二巻の完結おめでとございます。また、先生が初代会長の日本比較文明学会が、昨年、創立30周年を迎えられました。おめでとございます。

伊東氏 ありがとうございます。

知事 昨春秋に先生が出された『変容の時代』(麗澤大学出版会)の巻頭にある「科学の倫理学へ」という文章を拝読し、重要な問題提起だと思いました。昨今、科学研究者の不正が世間を騒がせ、教師の不祥事が相次ぎ、規範意識の欠如が蔓延しているように思いますが、先生は「科学の倫理」について早くから問題提起をされていますね。

伊東氏 最初に問題提起したのは、十年以上前に遡るでしょうか。振り返ってみると、正にその頃から「科学の倫理」が問題になり始め、今、顕在化してきたのです。これは日本だけでなく世界的な問題です。2002年にアメリカで「高温超電導」が成り立つという論文が、全て捏造だったという事件がありました。これは、STAP細胞の論文を巡る問題と似ています。要するに、科学が変質して

日本語化による新たな創造

知事 倫理は、科学に限らず、人の営みの根幹をなすものですが、欧米由来の科学の分野で、日本は数多くのノーベル賞受賞者を輩出しています。すでに戦前に長岡半太郎、本田光太郎、鈴木梅太郎など、ノーベル賞級の研究をしていました。

伊東氏 それは、明治維新の後に外国語が入ってきた時、西周や福沢諭吉たちが、それを日本語に訳すという、世界でも非常に珍しいことを日本がやっていたからです。そのおかげで、科学用語には、全て日本語訳があります。大学で学ぶ化学、物理も、みんな日本語です。ノーベル賞を受賞した湯川秀樹さんをはじめ、多くの方々は、外国の文献もたくさん読んでいましたが、日本語で教育を受けることができました。一方でいろいろな古典にも触れていました。だから、湯川さんの頭の中で、ヨーロッパ的な思考と日本の伝統がぶつかり、それが、陽子が中性子に、中性子が陽子に一瞬で変わるといふ、中間子論の着想へつながったと思うのです。

知事 湯川さんには「場」を見る目がありません。

伊東氏 そう、「場」なんです。中間子はその媒介者です。根底にある粒子が

きている。競争社会になって、真理の研究をせず、早く結果を出して、研究費を獲得することが目的になっていく傾向があります。

知事 なぜそうなったのでしょうか。

伊東氏 一つは、「分業化」です。科学者が「自分は研究の一部だけやればいい、全体として真理かどうかは知らない」という「部分屋」になったことが原因だと思っています。

知事 「分業」は、アダム・スミスが『国富論』の中で述べたのが最初です。仕事を手分けすることで効率を上げ、社会全体の富が増えるという内容で、「分業」は良い意味で使われました。しかしマイナス面もあります。18世紀から19世紀にかけて、西洋社会では分業化が進んだことで、様々な分野でプロフェッショナルが活躍する時代になりました。専門の学界も続々と創設され、それらが経済や産業と結びつくようになりました。例えば、物理学は軍需産業、医学は医療業界と結びつくというような関係です。

伊東氏 そうした結びつきが、科学の在り方に大きな影響を与えています。これは、欧米や日本と同じような状況です。ですから、今、世界的な規模で「科学の倫理」を創らなくてはいけない時であると思います。

万華鏡のように変わってしまうなんて、当時のヨーロッパ人には考えられなかった。でも湯川さんにとっては、全然おかしくなかった。むしろ固定して変わらないという方がおかしいのではないかと思つたのです。湯川さんがこういう発想ができたのは、日本の思想の伝統があったからです。西洋の理論を取り入れても、自国の伝統を保持できたのは、世界中で日本だけです。海外の文明や理論を新しく日本語に訳したことにより、それを伝統的な思想とぶつけて発展させ、独創的なもののできたのです。中国には、イギリスに留学して自国に進化論を紹介した厳復がいましたが、彼は、訳語を中国古典から採りました。そのため、その訳語で進化論を読んだ中国人は、こういつた考えは昔から中国にあったことじゃないか、という保守主義に陥ってしまったのです。一方で、日本では福沢諭吉や西周が漢字を組み合わせて新しい日本語を考えました。主観、客観、演繹、帰納、社会、物質など、いろいろな訳語を作りました。その後、その訳語が、中国へも入っていききました。

知事 古代中国は近世以前の日本の国づくりのベースになりましたが、現代中国のベースは近代日本であるとも言えます。東アジアの近代化に、日本



本人は主体的に、日本文化と日本語の中に、欧米の技術、社会科学、自然科学、文学など、フルセットで入れ込みましたね。

伊東氏 入れ込むだけではなく、日本の伝統的なものをぶつけて考えています。ノーベル賞を受賞した南部陽一郎さんの「自発的対称性の破れ」を考えてみてください。「自発的」破れです。神様がやるのではないのです。自分自身で対称性を破っていくのです。この発想も、南部さんが元々日本人であることと関係していると思います。ビッグズ粒子の発見も、南部さんの「自発的対称性の破れ」が原点です。その考え方はまた、小林誠さんと益川敏英さんに継承されました。

が媒介になって、欧米の科学技術の文明移転に貢献したからです。中国や韓国に日本人の翻訳した西洋概念の訳語が入り、それが中国と韓国の近代化・現代化に役立ちました。明治の日

文明を自国に取り込むという点では、先例があります。イスラムが750年にアッバース革命を起こし、その都であるバグダードにペルシア文明、インド文明、ギリシャ文明などが集中しました。彼らは、それをすべてアラビア語に翻訳しました。ギリシャ科学もアラビア語で研究したのです。しかも、それを独自に発展させた。文明を輸入しただけではありません。ギリシャ科学をすべてイスラムのものにして、更に発展させました。ところが今

品の価格を操作できます。買って売って、生じる差益だけを持ちだして経済には何も貢献しない。そこから何が起るかというと、マネーゲームで金を儲けた1%の人だけが集中して儲かり、99%がその残りを分け合うという状態です。これがアメリカで典型的に起きている現象なのです。

アメリカの哲学者ジョン・ロールズは、著書『正義論』の中で、格差原理として、「格差はあると認めなければならぬ。しかし認めるには条件がある」と言っています。一番弱い階級にも利益になる形で格差ができていなければ、その格差は許せないと考えている。このロールズの考え方は良いと思います。もう一つは、平等に利益を得る機会が与えられなければならないという、機会均等原理です。「誰でも社長になるチャンスはある。しっかりとやれば、誰でも課長になれる機会がなければいけない」と言っている。これには、私はちよつと違和感を覚えます。

知事 人は、それぞれの資質をもち、異なる社会的環境で育っているから、同じように出世するというわけにはいきませんね。

伊東氏 それもありますが、私が言いたいのは、地位とか役職というものは、

のイスラムはそれをやっていない。大学で科学を学ぶときに使っているのは、英語がフランス語です。自分たちの言葉で学んでいない。今、彼らが停滞しているのは、これが原因です。

知事 それは現在の日本政府が進める重要な問題提起ですね。自国の言葉を大事にしなくなれば、創造性、獨創性は出てきません。

伊東氏 そうです。小さい時から、全部英語で教育を行えばいいと言う人がいますが、そういう教育を受けた人は、流ちょうに英語をしゃべるでしょうけれど、創造性は養われません。

知事 富士山は芸術の源泉ですが、まさに自然は創造性の源です。人が生まれ育つ大地は多様性に充ちており、それが人の心をつくり、言葉をもった言葉になる。イスラム教徒がギリシャの遺産をアラビア語に置き換えたのと同じように、明治の日本人は西洋の科学も文学も日本語に置き変えた。そこに日本人の獨創性が胎胎していたのですね。

物心両面の豊かさを目指す

伊東氏 現代の資本主義文明を考える時に、経済的格差の問題は大きな課題です。私は、資本主義の発達は、4段

豊かさだけではありません。富は害も持っています。富を恵んでやるという上からの目線になってしまふ気持ちになりやすい。富者を「経済的なものに限定的ない」と、はつきりと位置づけた方がいいと思います。

知事 そのとおりです。物心ともに豊かでないといけません。物の豊かさよりも、心の豊かさの方が大切だと思う

階あると思っています。まず、13世紀頃に発達した「商業資本主義」。その次は1600年頃から「投資資本主義」が始まります。オランダやイギリスの東インド会社が行った、投資で金を儲ける経済活動です。今では当たり前になった株式の概念の登場です。次の転換点は1910年です。ヒルファーディングの『金融資本論』が出版されました。

知事 産業資本主義から金融資本主義への転換ですね。

伊東氏 個人や集団が投資するのはなく、銀行、すなわち金融資本が投資を行うようになります。では21世紀の現代はどうかというと、「MG資本主義」です。これは私が作った言葉で、Mはマネー、Gはゲームを表しています。「MG資本主義」に向かって大きく変動しています。この変動が本当に怖い。経済学は、稀少性の経済学から出発しました。足りないものを作れば、需要が供給に追いつくという、近代経済学という「均衡経済」です。ところが今は、稀少性ではなくて、過剰性の経済学です。物を作っても売れない。お金があっても買わない。では何をかうのか、お金をかうのです。实体经济とは全然関係ありません。しかも大金持ちは金融商

日本人が増えています。「心徳」ですね。「心徳」の豊かな人こそが真に立派であるということです。

伊東氏 そういふふうにおっしゃれば説得力があります。非常にいいと思います。まだ、話し足りないこともあります。改めてゆつくり討論したいですね。

知事 是非、また語り合いたいです。今日はありがとうございました。



伊東俊太郎 東京大学名誉教授

1930年生まれ。科学史、科学哲学、比較文明学の研究者。東京大学、国際日本文化研究センター、麗澤大学にて教授を歴任し、各大学の名誉教授。また、日本科学史学会会長等を務め、現在は日本比較文明学会、国際比較文明学会、地球システム・倫理学会の名誉会長。